学校における発達障害理解の現状と今後の課題

中鹿　　彰

１．はじめに

本学において2009年度に教員免許更新講習が開講されたが、筆者は「教育の最新事情」と心理学部主催の「発達心理学的見方」の2科目担当した。教員免許更新講習は本学においても初めてのことであり準備の段階から試行錯誤を行いながらの実施であった。「教育の最新事情」では「子どもの発達に関する、脳科学、心理学等の最新知見に基づく内容」分野として「発達を支援する」と題して、発達障害全般に関わる内容を取り上げて講義を行った。実際の講習では、主に発達障害への子どもへの関わり方について話をすることになった。特別支援教育を扱った書物はたくさん見られるが、筆者は臨床心理学が専門であり、心理学的な視点から見た発達障害を伴う子どもへの支援のあり方について講義した。もう一つの科目である「発達心理学的見方」では、発達障害についてもう少し掘り下げた「自閉症スペクトラム障害の理解」と題して発達障害の中でも中核的な障害である自閉症について専門的な内容の講義を行った。ここでは臨床心理学的な視点からみた自閉症スペクトラム障害の理解と支援について講義を行った。どちらの講義も、特別支援教育が始まったことで、近年注目されている発達障害に関わる内容で、参加された先生方にも熱心に聴いていただいた。

事前に知らされていた受講者の名前を見ると、両方の講座を受講している人もおられ、重ならない内容で、またそれぞれの講習で発達障害の理解をうまく伝えることについては、工夫を要した。また、講義終了後のレポート課題に対しても、先生方にとっても関心のある領域で、沢山の方に答案を書いていただいた。ここには、現在の学校現場で先生方が発達障害の子どもたちに関わってこられた経験と、それらの子どもへの関わった中での戸惑い等多々書かれていた。今回、それを取り上げて検討を加えていくことは、教育の場における発達障害に対する支援のあり方、さらには今後の特別支援教育の推進に当たって大きな参考となろう。本稿では、講習内容を振り返ると同時に、教員免許更新講習終了時に課題として提出を求めた答案の内容を資料として使いながら、今後、学校場面において発達障害を伴う子どもたち対して、どのように関わっていけばよいのか検討するものである。

２．講習後の感想を読んで

講習終了後、私の担当した講習を取り上げレポートを書いていただいた。筆者としてはこの課題を出すことで、先生方にこれまでに出会った発達障害を伴う子どもたちと関わりの振り返りをしていただくことも意図していた。そのため筆者の話を聞きながら、多くの先生方は、これまでに担任をした、関わってきた児童・生徒を思い描いて話を聞いていただき、講習を受けられた先生方から、発達障害に関わる問題について、現在学校で起こっている生の声をお寄せいただいた。同時にこれらの答案には特別支援教育を推進するに当たって、現在の学校現場で抱えている様々な問題が提起されたかと思われる。「教育の

最新事情」において、筆者の出した課題は、「これまでに経験した発達障害を伴う児童・生徒への関わりについて内容を詳述し、どのように対応したかまとめて下さい。その上で、今回の研修を受講したことにより気がついたことや、対応への振り返りを行って論じて下さい」で、また、「発達心理学的見方」での講義においては「今後、幼稚園、小・中学校ならびに高等学校において、自閉症・アスペルガー症候群等広汎性発達障害を伴うものと関わるにあたって留意すべき点を述べなさい」として、どちらも、講習を受講した上で今後の発達障害支援においての留意点を求めたものである。両方の講義の答案に書かれた内容から具体的に例を挙げて検討して、そこで出された課題について、幾つかの項目に整理してまとめてみたい。

⑴　二次障害としての理解

「しかし、いわゆる不登校や引きこもりが発達障害から起因するものであることを本日の講座で知ることになり、かって勤務しました学校での指導は振り返ってみますと適切ではなかったものと痛感しました。……あらゆる場面で指導の難しさを感じる毎日です。」

「先生の二次障害は将にあると思いますし、学年全体のサポートがあって３年間なんとか過ごさせることができたと思います。やはり、環境の整備が高機能障害を持つ生徒に大変大事であること身を持って体験いたしました。」

「個に応じた教育は重要です。検査をして正しく理解することは大切です。難しいのはどこで線を引くかだと思います。正直、本校にはおそらくと思える生徒はたくさんいます。すべての子に対応してあげたいのですが。最後に間違った認識からくる二次障害だけは引き起こしたくありません。」

「発達障害の子への対応で一番大切なことは、本人たちの苦しみ、劣等感、孤立感を理解し、共感してやるか、そして彼らが自己肯定感を持てるように、いかに周りがサポートしてやるかであると考える。そして「何ができないんだろう」と二次障害として悩み始める前に、できるだけ早く周りが、この障害を理解してあげることが重要であると思う。」

これらの答案では、不登校、非行、虐待、引きこもりの背後に隠れた発達障害について取り上げられていた。発達障害の二次障害として、不登校、非行、引きこもりと理解すべきものを、それらの理解を伴わないために表面的な対応となり、より指導が困難となった事例である。不登校、非行、引きこもりが全て発達障害に起因するわけではないが、発達障害を念頭において関わらないと、解決をより困難にすることが多くの場合見られる。子どもを見る視点を変えることによって、おのず自ずと関わり方も変わってくる。不登校、非行、引きこもりの現象のみに目を向けると、それらのことを何とか解決しようとして、教師、子どもも疲れることになるが、発達障害の視点から見ることにより、当面の不登校等への対応だけでなく、子どもの発達に今、何が必要なのか別な視点から子どもを見ることができる。このように背景にある発達障害に目を向けることで、それまでの表面的な問題解決だけでよしとするのでなくて、子どもの発達に即した対応が重要となる。また、このことにより不登校、引きこもりがすぐに解決するわけではなくても、問題を正しく理解することによって、本来の課題とは何か考えることによって、対処の方法も変わってくると思われる。また、これらの二次的な障害を防ぐためにも、学校全体で発達障害の正しい知識を身につけることが必要となる。

⑵　就労支援、生涯にわたる支援の必要性

「今日の講習を聞いて、高校生の場合ならば卒業後の社会に出てからのスキルをつけさせるという大きな課題が残っています。環境からの働きかけの軸が、今では大事でありそ

のことから現在の発達障害を見ていくことも本日改めて知りました。」

「大人社会がこのような子どもたちをもっと支援していく条件整備や施設、また教育をもっと広め、学校だけでなくて企業も十分理解しなければならないと考える。そして、このような厳しい社会情勢の中でも生活していく、就労していく力を身につけていけるような指導をしていきたい。」

「今回の講義で発達を支援するために、学ばせていただいたことで、私はほめることで自己肯定感を持たせることや個別的働きかけについて再確認した。二次障害に対する配慮にももっと気づかいが必要だと思った。そして、社会的な自立に向けての支援がまだまだ未熟だと感じた。社会でいきていくためにはどうしたらよいのかを、さらに丁寧に取り組んでいくことが、今後の課題だと思う。」

「一つひとつの対応をその場だけですぐに解決しようとせず、１年、２～３年のサイクルで見ると着実に成長を感じるし、適切な支援を受ける中で、今後も変化、成長を確信できる子だと思う。」

「先生のお話を聴く機会をいただき、保護者の思いを丁寧に聞き、本児の将来を展望したうえで、保護者とともに長期目標を立て、今、何をせねばならないのか考えていきたいと思っています。」

「今日の授業で長期的な子どもの発達を考えて指導すればよかったと反省した。そして軽度発達障害の重なりのあることも考えて指導すべきだったのかもしれない。目の前の暴力とパニックだけを見ていたのではないかと思って、今では反省している。」

先の二次障害の問題と同様に、発達障害の子どもに関わるに当たって、生涯を見通した支援を視野に入れることは重要なことである。今をどう過ごすかと同時に、学校を卒業後どのような生活を送るのか。子どもの一生涯を見通した関わりが必要となる。そのことから振り返って、今何が必要で、何をすべきか考えて行くことになる。落ち着きなさ、学習面での遅れ、対人面での困難さ等抱えている課題は様々であり、それを今学校場面で全て解決しようと目標を設定するとハードルが高くなり、教師も子どもも疲れる。それよりも将来を見越し、今何が必要か、何ができるか考えて、卒業後に必要なスキルを少しずつでも身につけて行く。このことにより、無理のない課題設定を行い、現実につながる支援が可能となる。また、これらの発達障害を伴う子どもたちにとって就労は大きな節目である。将来の就労に当たって今何を身につけておくべきなのか。また、このように将来を見通した関わりが、今後の教育においては必要となる。このことは発達障害を伴う子どもへの支援に関わらず、教育の場においてすべての子どもに関わる場合、考慮すべきことかと思われる。

⑶ 発達障害の子どもにとって、今、教育の場で必要なこと

「障がいを持つ子どもが、学校と言う安全圏から社会へと出てゆくとき、果たして今、理解することなど到底不可能な、いわゆる知識のつめこみが必要なのか、という壁にぶち当たった。…彼らと毎日接しているうちに、教科指導も大切だが、もっと大切な身につけるべき『生きていくための力』があるのではないかと思い出した。…彼らにとっては間違った対応ではなかったのかもしれないと思っていたが、今日の講義で確信に変わった。」

「養護学校が廃止され、各校で特別支援教育が進む中、定型発達から発達障害にいたるスペクトラムの中に全ての生徒（我々大人も）がいるという点では正しい方向なのかもしれないが、そのためにはどうしても現場に専門的知識を豊富に持っている専門家（スーパーバイザー）の常駐が必要だと感じている。」

「今回の研修を受講して思ったことは、学

習指導要領至上主義であると感じた。本来教育とは個人の能力に合わせたものが提供されるべきなのに、年齢による輪切りされた基準によって人間の能力の標準が決められることに関して少し腹立たしい気がします。人の能力にばらつきがあるのが本来の姿ではないのだろうか。」

「本日の講習では、今まで担任してきた発達障害と言われる子どもたちのことを思い出しながら、話を聞かせていただきました。「偏っていても問題を起こさない環境づくり」「支援するために一般論を個別化すること」「目の前にいる子どもの行動を理解すること」…教師の役割の重要性を再認識することができました。」

「今回、受講して障害を持っている本児への援助が主となりすぎていたことを振り返り、周りへの伝達にももう少し積極的に行っていきたいと思いました。」

学校においては特別支援教育がはじまり、発達障害を伴う子どもに対する教育も大きく変わろうとしているが、これらの答案に見られたように、先生方は特別支援教育の理念と現実のはざまで日々ご苦労をされているのかと思う。「学習指導要領」、「教科指導」も大切なことであるが、本来それらは子どもの教育のための手段であり、それが教育の全てではないはずである。教育とはこれらを用いて、一人ひとりの特性に合わせた関わりがなされるべきである。現状では、「学習指導要領」、「教科指導」を無視しての教育は困難ではあるが、もう一度原点に立ち返って本来の教育のあり方とは何か、特別支援教育の導入を機会に考えることは大切なことであろう。特別支援教育が始まったことで、発達障害に関する研修の機会も増えたが、単に知識として取り入れるだけでなくて、日々の教育の場を学んだことを生かせる場とすることが重要である。また、講義でも述べたように、発達障害を伴う子どもにとって、教育の場において本当に必要としていることは何なのか、よく検討することが重要となる。

⑷　発達障害と個性、発達障害の見極め

「本当に発達障害に当てはまらないことが多くあり、この子はLD、この子はADHDといういい方はできません。実際、あまりにも多動でパニックを起こす子がいて、専門機関を進めましたが、結局卒園する頃には他の園児と変わらず成長したパターンもあります。発達障害を見極めるにはかなり難しいと思います。」

「障害を認知された生徒に対してはさまざまな配慮がなされているが、その近辺（ボーダー）にいる生徒との対比の問題、特に評価に関しては常に頭を悩ませている。本来一人ひとりの生徒を客観的にそして平等に評価するべきであるが、認知されていない同レベルの生徒に対しても学習指導、その他の面でさらに配慮が必要でないかと考える。」

「今日の講義を聴いて、知的発達障害の当てはまる生徒は今の中学校にはたくさんいると思います。じっとできない、すぐにきれる、集中力が続かないなど。もちろん、学力も低いです。そういうボーダー、グレーゾーンの生徒たちに対して、授業に関しては私自身できるだけ視覚教材を使うことくらいしかできていない状況です。学校、学年の中でも何人もいるそういう生徒にどうやって焦点をあてていくかが、学校としての課題になるにではないかと考えます。」

軽度の発達障害の場合、定型発達との見極めが難しくなる。支援の必要な子どもたちは、文部科学省の調査にあった6.3パーセントだけでなく、周辺群も含めると約20パーセントとも言われている。この子どもたちの見極めは困難である。発達障害と診断を受けた子どもだけでなくて、診断まで行かなくても気にかかる子どもへの教育のあり方は今後の大きな課題である。どこまで個性でどこまで障害

と捉えるのか。本来であれば軽度発達障害の子どもの、その周辺の子どももひとり一人の個性に合った教育が受けられれば一番いいのかもしれないが、何らかの枠組みを作らないと子どもの状況が捉えきれなくなる。軽度発達障害とは子どもを捉えるための一つの枠組みと考えられないだろうか。関わるものがきちんと枠組みを持ち、軽度発達障害とその周辺の子どもへの教育とは何か、もう一度考えてみることが必要である。

⑸ 障害と環境

「今回の研修で、軽度の発達障害の子どもたちの『置かれた環境によって障害にもなれば個性にもなる』という言葉はとてもショックでした。たしかにそうです。軽度であればあるほど、その子の問題行動に理由や原因を探すことは難しく、気づきにくい、見つけにくいと思いました。…『環境しだいで障害にも個性にもなる』ということをしっかり心に刻んで今後関わっていきたいと思います。（もう少し早くに気づいていたらとも思いました）」

「今回の研修でラッキーにも対応はだいたい間違ってはいなかったような気がしました。ただ、やはり指導で泣かせたこともありました。今なら環境のレベルを下げるやり方も（他の生徒たちの理解を得た上で）、彼のスピードにより合わせた指導もできたかもしれません。」

「当然、そういう中では教師も生徒も多くのストレスを抱え、先生が言われたように自分の中で閾値を必要以上に高くしすぎていたように思います。」

「今日の講義を通して感じたことは、改めて障害の実態や配慮点について整理することができた。…障害のレッテルはりに終わってしまっていて、それ以上のその子に対する分析に進んでいかない実態がある。もっと発達段階との関連で子どもを見ていける力をつけていくことが大切と思う。」

障害と環境の関係は大きな問題である。先に述べた発達障害の周辺に位置する20パーセントとも言われる子どもは、関わり方によって大きく変わる。そのためには一人一人の個性、特徴をよく把握することが必要となる。現在、発達障害を伴う子どもの状況とその関わり方については、必ずしも十分に理解されているわけでない。今後、子どもが障害かどうかを判断するだけでなく、周りとの関わりにおいて子どもがどのように変化していくのかの検討する視点が必要となろう。特に軽度発達障害の子どもの場合、障害を固定的に捉えるのでなくて、環境との関わりで捉えることは、子どもを支援するに当たって重要なことである。関わり方を変えることに子どもの状況も変化する。難しいのはどのように一人ひとりの個性ある子どもに合った関わりを見つけるかである。一人ひとりの個性に合ったかかわりと先の学習指導要領に沿った教育は矛盾するかも知れない。学習指導要領とは平均的な子どもをモデルに作られたもので発達の偏りを伴うことを考慮しては作られておらず、軽度発達障害の子どものように発達の偏りを伴う場合、そのままでは困難でそれを一人ひとりの発達に合わせることは当然のことかもしれない。

⑹ 周りとの関係

「関係を切るのでなくて、うまくつなげられるようなことを子どもたちにわからせる。……周りもかわってほしい。受け入れてほしいと話をすすめる。もちろん、すぐに成果は出ないが、クラスの子と一緒に考え、私もともに成長する。」

「周りの人たちが自閉症の人をよく理解し、自分たちの仲間として受け入れることも大切である。周りが理解し、偏見を持たないように、周りの生徒も指導していくことが必要である。自閉症に限らず、すべての障害を理解

し、受け入れる心を育てていくことが必要であろう。」

「未発達な乳幼児期ではあるけれども、この段階にいち早く発見し、保護者の理解と地域の理解を求めていくことが大切だと思います。…この子はアスペルガーだから理解してほしいというのではなく、少しでも生活しやすい環境を学校機関は作っていく義務があるのではないでしょうか。」

「状況、必要に応じて広汎性発達障害の現実を、全体に伝え、理解を得る努力をしている。これはその生徒のためということだけではなく、大多数の健常の生徒にもそのような障害について理解し認知し同じ仲間として正しい知識をもった上で関わっていくべきだと考えるからである。」

これらのレポートでは、発達障害に対する周りの理解の重要性について取り上げられていた。この周りの理解については、大きく分けて二つの視点から書かれていた。一つは教師等大人や社会からの理解の必要性、もう一つは同年代の児童、生徒に発達障害についてどのように伝えるかである。学校場面における教師の理解は、特別支援教育が始まったことで徐々にではあるが進んでいる。これに対して社会における理解については発達障害者支援法が作られたが、広く知られているとは言えず、まだまだ不十分でこれからの大きな課題である。

さて、特別支援教育等の推進に伴って、自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障害等の名前はよく知られるようになってきたが、反面、正しく診断をつける意味が理解されず、レッテル貼りに終わるなど様々な弊害も見られる。発達障害と診断をつける意味について、教師等子どもに関わるものが正しく理解することがこれからの課題であろう。そのためには、次の段階の理解が必要である。まず、発達障害を知る。この段階は、学校場面においては現在のところほぼ達成されたかと思われる。次の段階は、レッテル貼りに終わることなく診断をつけることの意味である。診断をつけるためには、その診断がつく当事者にとってどのようなメリットを伴い、プラスになるのかきちんと押さえておくことが必要である。このことなくして、診断をつける意味はない。診断をつけることによって、周囲の理解が得られ、環境が整えられ、本人が生活しやすくなる状況が作られることが重要である。本人の行動を全てその診断名に押し付けることが診断をつけることではない。診断をつけることによって、周りが本人の行動を理解できる反面、その子どもを見ずに診断のみを見がちな側面は気をつけねばならない。

周りの大人の理解とともに、さらに難しいのは同年代の子どもの理解である。これは、子どもを指導する立場にある教師等が正しく理解できずに、発達障害への表面的な理解で子どもを指導しようとすると、よけいに混乱につながる。また、当事者である子どもの気持ちも大切である。機械的に対応するのでなく一人ひとりの子どもに沿った対応が必要であり、発達障害を伴う子どもの気持ちを理解せずに、周囲に理解を求めても無理である。

⑺　多方面からの理解

「一つの原因よりも、幅広く行動特徴をよく見て診断をしていくことが大事。それぞれの違いを知って、子どもたちに接して行き、発達の偏りがある生徒を見つけてその子どもの心に応じた教育をする。IQのレベルだけで考えないで、発達のばらつきについて知的障害、自閉症も考えていく。」

「留意すべき点は実行機能の障害への対応として、事前にスケジュールを示す、前もって伝える、急な変更は行わないなどが考えられる。…支援のためには認知特性をよく理解した支援を行う。認知特性に合った安心できる環境の提供、無理に周りと一緒、普通と同じを強調しない、発達にあった達成可能な目

標の設定、本人の興味、関心に焦点を当てた支援。」

「現在もまだまだ研究が必要なことも多くあると思われるが、彼らに対する理解を得るという点ではかなりの要素が解明されてきている。昔に生きていた彼らはなんと生きにくかっただろうと思う。生きにくさでいえば、現在も同じかもそれない。まだまだ理解されているとは言い難い現状である。知識として持っていても障がいの範囲は非常に広く、「ちょっと変わった人」から「トラブルばかり起こす人」から、実際の対応には難しいことが多い。特有の行動のパターンから誤解を受けることも非常に多い。」

ここでは、自閉症と聞いて名前は知っているが、その発達的特徴を正しく知ることの重要性について取り上げられていた。これまでの発達障害理解の中心は知的障害であった。そのため、知能指数での区分による障害理解はよく知られており、わかりやすかった。自閉症はよく知られているように、社会性の障害、コミュニケーション障害を伴ったものである。これらの障害を発達的側面から見ると、発達のばらつきの大きさとなる。知能指数は知能検査ではかることが可能である。発達のばらつきは知能検査のプロフィールで見ることになるが、知能指数ほど明確なものでない。また、自閉症のレベルを見る査定法も考案されているが、まだまだ学校で使えるほどには一般化されていない。どうしても知能指数を測定するほど明確ではなく数値化も困難で、理解が難しく、発達障害への理解も遅れていた。最近になり、ようやく一般にも知られるようになってはきた考え方である。今後、発達の偏りの意味についてさらに検討することが必要であろう。

⑻ 自閉症の障害理解への気づき、障害特性に合った関わり

「自閉症、アスペルガー症候群に見られる感覚が過敏であるといった面、他者が注目している同じものに自らの目を向けることができにくいといった面、まわりにまどわされず一つのことに集中がいってしまうという面、…そういった理由からコミュニケーションが取りづらいのだと改めて理解できた。そういった生徒と接するとき、あってはならないことは密であるということだと思う。」

「定型発達から発達障害にいたるスペクトラムの話があったが、どこで線を引くのかでなくて、状況に応じた対応、指導をすべきで、「自閉症」、「アスペルガー」と名称はあるが、今回の講義を聞いて、自分自身にもあてはまることがたくさんあった。科学的に障害をとらえる必要はもちろんあるが、目の前にいる子どもには、そんな線引きや名称はどうでもよいことで、いかに誠実に目の前にいる生徒に対応するかだと思う。それができてこそ、専門家のアドバイスや自分の知識が生きてくるのだろうと思う。」

「その特性を持つ子どもたちには柔軟に早期の対応が必要だと考えられる。何故なら、マニュアルや段取りばかりにとらわれている間に二次障害がおこり取り返しのつかない事態に発展することがあるからだ。障害特性を知った上で対応すれば、未然に防げるトラブルは多々ある。しかし、一般の学校ではまだまだ発達障害の認知が遅れていて、トラブルが起こってから対応するという後手、後手に回ることが現状のようだ。それでは当事者の傷つき体験が増え、自己不信感が芽生え、またまわりからは奇異な目で見られ孤立化していくと思う。発達に対する理解、また発達障害に対する正しい理解を教員全員が持っていれば二次障害へ至るケースも激減すると考えられる。…図式化したり、文字で書いて伝えたり、工夫が必要である。パニックが起こった時には、一時落ち着かせる部屋を用意するなどハード面の整備も大切である。しかし、一番大切なのは障害特性を含め、ひとりひとり

の個性を丸ごと受け止めようとする、理解しようとする目線や姿勢だと思う。それを学校全体で取り組んでいかねばならない。周りの理解が子どもの人生を左右することもある。」

ここでは、発達障害と定型発達の連続性、早期での対応の重要性、二次障害の防止について多く書かれていた。まず、正しくその子どもの特性を認識することである。現在、自閉症スペクトラム障害として重い障害から軽いものまで連続的に捉えられている。最近ではよく知られるようになってきたが、この意味が日常の支援で充分に役立てられているわけでない。ここの理解は難しいところである。

特別支援教育に当たって、文部科学省の調査では発達障害の子どもは6.3パーセントとしている。また、その周辺に気になる子は20パーセントもいるとされている。診断されるまで行かなくても気になる子どもへの関わりはこれからの検討課題である。それと言うのも、これらの子どもは周りの関わり方によって大きく変化する。子どもと環境の問題は大切なものであるとはされながらも、これまで適切に捉えられてきていなかった。軽い発達障害の子どもが相談にくるのは、発達障害そのものよりも、二次障害としての不登校、非行、被虐待等がきっかけである。これらのことで相談に来て、初めてその背後にある発達障害に気づかれることになる。ここまで来るとこじれていることが多く、子どもの心理的なケアが必要となる。

⑼　子どもの特徴を知る

「その子どもが何ができて、何ができないのか、何に困っているのか知ること。そしてできないこと、困っていることを困っているときだけ、必要としているときだけ手助けする。…彼らの障害について、触覚や聴覚が定型発達の子どもと違うと知ったので、私が今までしていたことが、もしかしたら彼らにとって不快なことだったのではと思いました。」

「まず、個々の生徒の症状をしっかりと把握することである。…程度の軽重、二つ以上を伴うもの、どちらか判断つきにくいものがあった。また、その特定の環境では表面に出ない場合もあるので、しっかりとした判断が必要である。」

「いろんな課題を持つ生徒に関わるときに大切にしたいこと。目の前の生徒を育ててきた保護者や指導されてきた方々の話をしっかりと聞かせてもらうこと。わかったふりをせず、理解できるまで色んなことを教えてもらうこと。一人で悩まず周囲の人に助けてもらうこと。アスペルガー症候群の生徒と関わってきて、…自分の言葉で周囲のクラスメートや友だちに伝えることも大切かなーと思って実践してきました。アスペルガーの生徒が生活しやすい安心な学校は他の子たちにとっても、快適で楽しい学校になると思います。」

「発達にあった達成可能な目標の設定、本人の興味、関心に焦点をあてた支援、自己肯定感を育てる関わり等である。そして何よりも適切に支援を受けることができる環境作りが大切である。…自己否定感につながり、いじめや不登校の要因にさえなり得る。このような状態は本人にもクラスメートにとってもマイナスなことであり、正しい理解を促し受容するクラス作りをすることに努めなければならない。」

子どもの発達特徴に合った関わりを行うことは大切なことである。特別支援教育が始まり発達障害に対する知識は広まったけれども、一人ひとりの子どもを前にして、子どもの特性に合った個別の支援方法を見つけることはなかなか難しい。ここのレポートにあるように、研修等を通じてまず子どもの発達特性を正しく知ることである。それなくして、個別の支援計画はありえない。ややもすれば、子どもの特性を正しく知らずして、外面的な行動から判断して、わかったような気に成りがちである。特別支援教育を本当に意味あるも

のにするには、子どもが何に困っており、どのような支援を求めているのか、子どもの内側から理解しようとする視点が必要である。最近では、自閉症の当事者による手記も出版されており、内面からの理解も以前に比べると可能となってきた。そこでの感覚の違い、世界の捉え方の違いを理解した上で、日々の支援に役立てることが重要となる。

⑽ 将来を見越した支援

「しかし、知識だけではいけないことをこの講習で学んだ。しっかりとルールを言語でも資格でも植えつけていくこと、二つにできることは時間をかけてでも自分でさせ、できないことはそのことのみ支援していく。…今という発達段階の生徒に教えることが社会人になる前の生徒に最も大切であると考える。どのような生徒も失敗や間違いはある。しかし、社会ではその失敗や間違いは大変なことになるのだ。今の失敗や間違いも今でも正せるように支援して行きたい。」

「単に性格の問題ではないという認識。これを学校も家庭も持つべきである。高校で何とかやりおおせても、社会に出てからの年月が長い。保護者の理解を求めつつ、最良の相談機関などにあたるべきである。学校ではスタッフ全員が障害の理解をした上で適切な指導を行う。例えば、全員に言って伝えるだけでなく、個別に生徒によくわかるように指示を出すなどである。クラス集団、学年、学校集団の理解が必要である。…非常に困難なことであるが、学校においては最も重要なことであろう。しかし、いずれにしても、日本の社会全体の（企業や地域の）理解と知識が必要とされていると考える。」

これらのレポートでは学校卒業後社会に出て行くとき、また社会に出てからを考慮に入れた支援の必要性について述べられている。社会に出て行くことから振り返って、学校生活で何を獲得することが必要で、そのためにはどのような支援をすべきか考えて関わって行くことが重要である。ここにもあるように、学校では失敗も許されるが、社会に出ると厳しい世界となる。学校にいるうちに失敗も含めて様々な体験を積むことで、社会に出てからそのことがうまく生かせればよい。学校で全ての行動面の課題を解決しようすると無理が生じる。学校は社会に出て行くための準備の場と捉えて、時間をかけて解決に向かうことが重要である。もちろん、社会の側で発達障害に対する理解が得られるのが望ましいが、すぐに社会に理解を求めることも難しい。まず、特別支援教育が始まったことで教育の場で理解が得られ、そのような理解が社会に広まることが今後の課題であろう。ここにもあるように、学校において、児童、生徒の間で発達障害への理解が得られると、その子どもたちが社会に出たとき、また社会での発達障害への理解も変わってくると思われる。教育の力で発達障害への理解も以前に比べると進んできてはいるが、これらのことが目に見える変化になるのはもう少し時間がかかるだろう。

３．おわりに

ここまで見てきたように、教育現場において先生方は発達障害を伴う児童・生徒へ対して、様々な工夫をしながら関わってきておられる。特別支援教育は始まり、発達障害に対する研修の機会も増えてきたが、それらはあくまでも一般論としての発達障害についての知識であり、実際に子どもに関わる場合、それを一人ひとりの発達特性に合った方法に工夫していくことが必要である。誰にでも使える一般的な方法はない。研修で学んだ一般的な知識を子どもに押し付けるのでなくて、その一般的な方法から子どもにとって応用できる部分のみを取り出して、子どもに合わせて作り上げることが必要となる。それを日々の

関わりで用いることとなる。決してその反対ではない。ここが先生方の迷われるところである。一人ひとりの子どもに合った支援のあり方を見つけるためには、それなりの経験と知識が必要である。

特別支援教育の主旨とは発達障害児を増やすのではなく、本来は発達障害のある子もない子も全ての子どもの個性に合った教育を目標とするものであろう。発達障害と診断されなくても、その子どもに合った教育が施されるべきである。何も発達障害の子どもに対する特別の支援でなく、一人ひとりの子どもになった教育が目指されるべきである。そのための方法の一つとして特別支援教育を位置づけるべきである。特別支援教育を機会に、もう一度教育本来のあり方に立ち戻ることが必要かと思われる。特別支援教育は始まったが、まだまだ試行錯誤の段階である。レポートにも書かれていたように、その日々、子どもを前にしながらどうすればよいのか迷いながらも工夫していくプロセスが大切である。最初から完璧なものはない。特別支援教育が始まったことで発達障害の子どもたちへの支援方法が完成したのでなくて、それをスタートにいいものに作り上げることが重要である。そのためには、研修会に参加すると同時に、今回のレポートに見られたように現場での声を聞いて、フィードバックして、今後につなげていくことが必要となる。また、そのことを積み重ねることで、社会においても少しずつでも発達障害に対する理解が前進するのであろう。

本稿では、教員免許状更新講習時に行った答案を基に、現場の先生方がこの講習に何を求めているのか、また講習の狙いは正しく伝わったのか、これらを知ることで今後の発達障害理解に役立てられることも多々あるかと思われる。私の講習では、発達障害児への支援を取り上げたものであるが、見てきたように先生方それぞれにそれまでに関わってきた子どもの姿を思い描いたようである。今後はこれらのことを踏まえて、学校現場で役に立つより実践に即した内容が必要となろうかと思われる。

特別支援教育は始まったが、実のあるものに、また、それが一人ひとりの子どもにとってはどのような意味を持つのか正しく理解されるためには、もう少し時間がかかる。特別支援教育で多くの子どもたちが支援の対象となったことは一つの利点ではあるが、本来教育とは一人ひとりの個性に合った対応がなされるべきである。先にも述べたように軽度の発達障害の子どもの周辺には、さらに多くの気にかかる子どもが存在しており、それらの子どもは周りからの関わりでどのようにも変化する。本来なら不適応を起こす前に環境を整えるべきである。特別支援教育は不適応となった子どもへの支援で一歩を踏み出したわけではあるが、今後はさらにそのような不適応を引き起こす子どもを生み出さない学校、社会の側の環境を整えることが重要かと思われる。今回の講習を担当して、先生方の答案を読む中で、これらのことが理解されて初めて特別支援教育が子どもたちにとって真に意味のある制度になるのかと思われた。また、先生方の答案では本人の思いに沿った関わりの重要性が述べられていた。6.3パーセントの支援が必要とされる子どもたちにとって、本当に必要なことは何か、発達障害を伴う子どもの特性を理解してよく見極めることが重要である。同時に現実的な課題への対応も重要なことであるが、もっと子どものこころに目をむけ、障害としての視点からだけでなく、一人の人間としての営みに答えていくことが最も大切なことかと思われる。

参考文献

杉山登志郎　2000 「軽度発達障害」『発達障害研究』21号

杉山登志郎　2001　アスペルガー症候群および高機能広汎性発達障害を持つ子どもへの援助　発達85　ミネルバ書房

杉山登志郎　2007　ライフスタイルと発達障害　臨床心理学　第７巻　第３号　金剛出版

中田洋二郎　2006　軽度発達障害の理解と対応－家族との連携のために－　大月書店

松尾直博　2005 「気がかりな子」の発達的特徴　児童心理「気がかりな子」の理解と援助　金子書房